春夏秋冬

武蔵野会ニュース No.178 令和2年 7月15日
発行 社会福祉法人武蔵野会
本部 東京都八王子市旭町12-4.201 TEL042(631)6341
https://musashinokai.jp/

特集 平成31年度事業報告

「生活介護；お気に入りのバンビ組み立て作業」
白鳥福祉館

トーク

「今こそ連携を進め、ポストコロナは共生社会の実現を」

想像すらしなかった新型コロナウイルスの感染拡大は、終息の道筋が見えぬまま、世界中が混乱の中にいます。混乱の中心は感染の恐怖や生活の不安だと思いますが、同様に深刻なのは恐怖や不安から生まれる怒りや排他的な感情の広がりです。感染者と家族、患者を支える看護師・医師とその家族への偏見、過度な自粛意識による他人への攻撃、感染が多い地域や住民への嫌悪といった負の感情を報道等で感じます。

一方で、世界に目を向けると、権力の強大化も始まっています。極端な例では、感染拡大を抑えるために、方針に従わない国民に発砲を許可する国や、新型コロナを問題にせず、全く対策を取らない国もあります。また、アメリカでの人種差別問題、中国の国家安全維持法制定など、人権にかかわる大きな問題も起きています。新型コロナウイルスがもたらした負の感情が直接、間接に影響しているようにも見えます。

そういう中で、ドイツのメルケル首相が、感染防止のため、やむを得ず国民の生活を制限せざるを得ないことに了解を求めた話は印象的でした。他の国でも女性首相の国民への丁寧な説明が目立ちました。コロナ禍に際し、国民と信頼関係を結べた国は新型コロナウイルスの対策も功を奏し、感染者を支える人への感謝や多くの支援活動などを他国にまで広げています。また、アメリカの人種差別に関しては、BLM運動が世界中に広がり人権意識の高まりを見せています。

ポストコロナは、負の感情に負けず、排他的ではなく共生する社会に向かいたいものです。まさに日本では世界に例を見ない少子高齢社会を迎え、地域共生社会を目指しています。コロナ禍の中で私たち福祉従事者の役割はますます大きくなり、ポストコロナに繋がっていくと思っています。

社会福祉法人武蔵野会　理事長　高橋　信夫

平成31年度 社会福祉法人武蔵野会 事業報告

福祉を取り巻く現状への対応

現状の福祉課題とその対応のため東社協や経営協の各委員会や部会で法人職員が役員として参加した。人口の減少加速と働く世代の縮小、高齢者急増、格差や貧困の拡大等の課題が見込まれるが、とりわけ1400万人都市である東京都はその傾向が顕著であり、今後の持続可能性の条件に福祉の課題が含まれることを実感する年だった。8050問題、引きこもり年代層の拡大、女性の自立支援、子供や高齢者の貧困問題等、生きにくさや社会的孤立への支援は、社会福祉法人が地域社会においてできるところからやるべき課題であり、法人の10か年計画に位置付ける必要性が明確になった。武蔵野会は、前記の活動を通して様々な福祉団体と関係を深め地域共生社会の実現に向け、東京都のみならず近県の情報や意見交換が可能となった。また、今後の社会福祉法人の役割を地域社会に知らせるため、法人が行う地域公益事業や支援実践に関して東京や全国において発表する機会に恵まれた。日本福祉大学との連携は、これまでの防災関係定期研修、大学院生への講義に加え、少子高齢社会での法人運営に関する提携法人ワーキング、全国福祉大学卒業生の福祉就労の推進研修講師派遣等広がったものも多かった。社会福祉法人の継続課題は、年々深刻化する福祉人材の不足、経営の要であるコンプライアンスとガバナンス強化、地域公益的事業と地域共生社会の促進、災害対策・災害派遣などだが、これらは年度に関係なく継続的にあらゆる機会で検討を重ねた。また、本部では採用担当職員を置き、福祉の魅力、社会福祉法人の必要性等、福祉の認知を高めるための情報発信をホームページの改定等を含め積極的に行った。

第5期中期計画の2年目

昨年同様「多様性理解」「権利擁護」「包括的支援」「福祉教育」を柱に継続した。生きる上での課題が、より複雑化する社会にあって、法の狭間で多様な生きにくさを抱える人たちの存在と理解に努め、各施設が、地域で当たり前の生活につなげ、権利を行使できる支援を模索した。建て替えは練馬福祉園が喫緊の課題だが、コンサルティング内容と業者の選考に時間を要した。次年度は、新会社と連携を深め、建て替え計画を進めていく。また、大島家族会の席上、恵の園の都内建て替え計画を、家族会と連携して進めることを発表した。建て替え資金は、利用率向上と各地区が積極的に福祉ニーズを捉え、新事業を生み出すことで収支差額の本部繰入額増を計画し、社会福祉法人の使命達成と収入向上の継続した努力が必要で長期的な課題でもある。

理事会、評議員会、運営会議、施設長会議実施状況

理事会は第285回から6回、評議員会は第21回から3回開催した。このうち289回理事会、22回評議員会はリアン文京の「東京都障害者（児）移動支援従事者養成研修事業」の事業開始の都合上3月の理事会、評議員会では間に合わないため、文書決議にて提案を可決した。また、感染症予防の中、事業計画や予算審議以外に、定年を迎えた3名の執行理事の退任と新たな選任の審議を行った。理事会と評議員会には施設長が順番に陪席し議事録を作成した。

人材育成、採用、福利厚生

福利厚生は24時間365日受付の健康ダイヤル、武蔵野生活倶楽部による余暇活用プログラムを継続した。一昨年成果を上げて終了した子育て支援プロジェクトは、現場職員からの要望も多くプロジェクトを再開し子育てにやさしい職場環境への検討を再開した。採用は全国的に人材確保が課題だが、特に福祉業界は東京都が全国一高い求人倍率である。このため法人独自の採用イベントを検討し、現場で働く若い職員をエバンジェリスト（伝道師）として求人活動を行った。採用担当を配した効果は表れているが、十分な数ではなく、各施設の採用活動の工夫と本部との連携がなお必要である。

利用者の高齢重度化、重複化への対応

各施設では利用者の高齢重度化、重複化に加え、強度行動障害、発達障害、精神障害等の支援が難しい利用者対応が求められた。都から出された対応の難しい利用者に対する支援対策等は、支援体制、職員教育、保護者対応などの改善を計画的に実施し評価を得た。さらなる改善と支援力向上の取り組みは次年度も継続する。各地区の実践事例報告会や実践事例集では、高齢化に伴う重度重複化への実践、施設だけでなく地域の課題への対応など、様々な実践が報告された。各施設では支援力向上において、機能訓練や嚥下、経管栄養などの食に関わる専門知識とスキルに関して研修の実施や必要な資格取得を進めている。看護師では重症心身障害認定看護師の資格を取得し、支援員が中心となる現場での医療的ケアの研究を論文とした。強度行動障害支援では、東京都の支援者養成研修事業の講師を数名の職員が担うなど、都研修への協力を実施した。烏山が基幹型の相談支援センターを受託し、主に精神障害者の相談を受ける相談支援事業所として試行錯誤しながら地域の期待に応えるべく運営を行った。

プロジェクト実施状況

4つのプロジェクト「規程全般の見直し」「コンプライアンス」「研修・防災」「建て替え資金計画」は3年目となり執行理事が継続して担当した。「規程の見直し」では規程全体の整備が進み各種法改正の対応準備等を行った。「コンプライアンス」では、全体の課題分析から今後の対応と見通しを全体発信した。その他、小平福祉園をモデル施設とした施設診断をPTで行い、年度末にその結果を全体発表した。研修委員会は、人材育成の一環とした役職者のプロジェクトを、法人全体の人材育成組織化への準備期間としてきたが、形態も整ったため全施設に研修委員を配置し通年で計画的に研修を実施した。eラーニングの契約も行い、今後の運営準備も整えた。防災は後述するが、委員会を中心にした法人総合防災訓練も2年目となり、より実効性の高い訓練となった。

新規事業の建設と建替え資金計画

法人初の重度障害者対応のグループホームとして建設した「おいずみまちホーム」は職員不足のため週末の運営ができず次年度の課題となった。「リンクス椚田」でも生活介護、ショートステイ、グループホームの機能を持たせたが、初年度は生活介護事業の定員に余裕を持たせて運営を行った。今後のショートステイ、グループホーム事業の準備を計画的に行うことが課題である。建て替えに関しては、前述の通り練馬福祉園が喫緊の課題であり、コンサルティングの内容と業者の選考にも目途をつけたので、次年度以降、計画を進めていく予定である。

防災関係

防災は昨年度までに準備した各施設のBCPが法人全体で連携したBCPとなるよう2年目となる防災訓練を防災委員会が中心となって実施した。防災サミットで学んだ災害対策研修により、施設ごとに用意した防災キットを使い災害現場で実際に職員が対応できることを前提とした訓練を行った。また安否確認システムは全体訓練前に大規模台風が2回上陸し、15号時に課題となった連絡システムを、19号の際に活用して安否システムの確認を行った。3月には法人全体の訓練を行い、安否確認システムの利用率向上に成果を見せた。今後も継続的に訓練を実施し、いざというときに使えるシステムを維持していく。

むさしの武蔵野

コロナ禍における新しいオリパラのかたち

国内外問わず目下の重大問題は新型コロナウイルス感染症の感染拡大をいかに防ぐかです。半年前は予定通り開催出来るであろうと考えていた東京オリンピック・パラリンピックの延期が3月に決まり、開催まであと1年となった今、改めて開催の是非が活発に論じられています。私は住まいのある自治体でスポーツ推進委員を務めていますが、地域におけるスポーツのあり方を学ぶ研修会で、目から鱗が落ちるように自分自身のスポーツ観が変わる経験をしました。

講師曰く「スポーツとの関わり＝参加には、する、観る、支える、聴く、読む、話すという多様な側面があります。そもそもスポーツは、人間として育まれるための必須の文化であり、全ての人々の生活で身近に存在し、社会づくり、街づくりにもつながるものなのです」。

2011年に施行されたスポーツ基本法には「スポーツは人類共通の文化である」と明記されています。世代や性別、身体の特徴や特性、障害の有無等に関わらず、全ての人々が生涯にわたり地域社会で心身ともに健やかに生活していく上で不可欠なものである、というのが現代のスポーツのあり方だと言われます。多様な人々の存在や生き方・人生を支えていくスポーツの実現が地域共生社会づくりの上でも重要です。

コロナ禍の中、従来の重厚長大で一点集中型のオリパラを東京で開催するのは最早困難でしょう。今改めて、オリンピック憲章の「人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てる」という大切な目的を再確認すべきと私は考えます。

スポーツは人としての権利であり、いかなる差別も受けず、友情と連帯、フェアプレー精神とともに相互理解を深めるというのも崇高な理念。近代オリンピックの父と言われるクーベルタン男爵が「参加することに意義がある」と説いたことを想起し、人類の英知と技術を駆使、国境をこえ多様性が尊重された新たな参加のかたちを創り出す協働が問われます。

東堀切くすのき園
施設長　金澤　正義

ニュースラウンジ

花まつり

さくら学園

5月30日（土）に、「花祭り」を行いました。例年との違いは新型コロナウイルスの影響で、地域の方をお呼びできず、園内でフロア毎の開催でした。

学園は4フロアあるので、皆さんが楽しめる趣向を凝らした1日ゲームの日となりました。

1号館2階は「射的大会」。職員がヒーローのかぶり物を用意し、景品は皆さんの欲しい物がとれる配慮をしました。真剣なまなざしが素敵でした。

狙いを定めて「パン！」

1号館3階は「ゲートボール」、「フリスビー」、「エアホッケー」、「輪投げ」、「ストラックアウト」。ゲーム後は全員に景品をプレゼント。可愛い小物やお菓子に大歓声でした。

3号館2階は「ストラックアウト」、「射的」、「ムシ取りゲーム」、「ツイスター」、「釣りゲーム」。装飾の花作りから始め、150mの回廊式廊下を楽しみながら巡る趣向のゲームでした。

どの虫を捕まえようかしら

3号館3階は、職員がお好み焼きを用意している間「景品付きのくじ引き大会」を実施。お好み焼きは皆さん大好きだと言ってくれました。

障害特性に合わせて工夫するなど職員が作成したゲームもあり、皆さん楽しいひとときを過ごすことができました。

大盛況の金子政司展

第2大島恵の園

当園利用者の金子政司さんの個展が、大島町元町の藤井工房ギャラリーで開催されました。

素晴らしい作品の数々です

藤井さんは工房の便りに金子政司展の紹介記事を入れ、新聞に折り込み、島内に配布しました。来場者には作品をプリントした葉書が配られました。そのおかげで、コロナ禍ではありましたが地元出身の金子さんを応援したい気持ちで藤井工房を訪れた方が多かったようです。そして素朴な作品に触れ、購入してくださいました。中には、帰宅後、さらにもう一枚買いたいと出直された方もいたそうです。

作品は、三原山にいる馬、水族館で見た魚やウミガメ、ドライブで見た波浮港や筆島などの風景、港に浮かぶ船などが中心です。その多くがベニヤ板にアクリル絵の具を使って描かれています。販売価格は、500円から10000円と、安価に設定しました。大満足の金子さん、売上は全て貯金したそうです。

これまでに描きためた作品を展示したところ、68点中45点に買い手が付く大好評でした。

個展は、工房の藤井虎雄さんが金子さんの作品を多くの人に知って欲しいという思いから開催されました。作品展示から販売まで、全て藤井さんのボランティアです。当初は4月26日から2週間の予定でしたが、好評のため作品を追加し5月末まで延長されました。

金子さんと作品

画面越しの満面の笑顔！ リモート面会での久々の再会

西水元あやめ園

「お母さん元気？」。久しぶりにご家族と顔を合わせた利用者の方が、「まさか、こうやってテレビ電話で会えると思っていなかったから泣いちゃったよ」と言葉を詰まらせ涙を浮かべていました。

西水元あやめ園では今年の2月から季節性インフルエンザに続き、新型コロナウイルス感染症対策でご家族の面会をやむを得ず制限しています。感染症の流行が長期化して、面会の再開目途が立たない状況が続いており、利用者やご家族からは「いつになったら会えるのですか」とご心配の声もありました。

せめてお顔を見ながら会話ができる機会を作れないかと、6月からスカイプというウェブツールを使った、リモート面会を始めました。ご家族に来園いただき、別室からリモートで面会する形式です。画面越しの面会や慣れない機械に対する不安もありましたが、いざ面会が始まると、涙ぐむ方、いつもと変わらぬ笑顔を見せる方、冗談を言いながらご家族と談笑される方もいました。

面会制限の期間中は、担当職員がご家族に普段の様子をお伝えしていましたが、「実際に顔が見られて安心しました」とのお言葉をいただきました。多い日は1日に3～4組のご家族がリモート面会を利用されています。

新型コロナウイルスの感染者は現在も発生しており、今後は新しい生活様式を日常化していくことが求められています。そのような中でも利用者やご家族が安心して生活を送れるよう、支援をしていきます。

笑顔に会話も弾みます

リモート面会で久々にご主人の顔を見た後、体調が良くなった利用者の方もいました。ご家族との繋がりがもたらす力と深さに、改めて私たちはそのつながりを大切にしていくことを感じました。

地域活動再開

小平福祉園

子育てを取り巻く環境は新型コロナウィルス感染症の拡大で大きく変わりました。自粛による保育所と学校の休止、外出の自粛、子どもの虐待が増える懸念も高まり、改めて地域での子どもの見守りの機会が重要視されています。

地域での支え合いを原点とした、地域の親子に遊び場と居場所を提供する「すまいる広場」は、6月にようやく再開しました。親子が安全・安心して過ごせるように、検温等の実施と玩具の消毒や換気、空き部屋の活用等で三密を防ぐ対応を徹底しています。制限されることも増えましたが、利用する親子と地域の方と一緒に「新様式の遊び場」を創っていきます。

7月からは、子ども食堂（多世代の地域食堂）も形を変えて再開します。コロナ禍では、食堂で繋がっていたセカンドハーベストやフードバンクなどからの多量の食材を社協や子ども家庭支援センターに届ける活動を継続してきました。増え続ける生活困窮の方への支援は、食事の提供を通じてこれからも地域の皆様と連携して力を入れていきます。

再開したすまいる広場

ガウン作成

烏山福祉作業所

新型コロナウイルス感染者数の増加で、国内外においてマスクやアルコールなどの入手困難な状況が長期間続きました。感染リスクと闘いながら日夜、治療に尽力される医療従事者の皆様への感謝の気持ちと、このような状況下で法人の一員として自分たちにできることは何かと考える機会になりました。私たちの作業所では、緊急事態宣言が発令された後、受注作業が大幅に減少し、仕事がないという日が続きました。そのような状況下でできること、貢献できることはないかと考え取り組むことになったのがガウン（防護服）の作製です。

当初は作業着のつなぎをイメージし、ズボンの部分に苦戦したり、合わせた紙の上へ職員に寝転んでもらい型紙を作ったり…、完成までに試行錯誤が続きました。ガウン型の防護服が出来上がった後は、ローテーションを組んで50枚から、100枚、300枚と目標枚数を増やして作製を続けました。防護服といってもポリ袋を活用したもので、商品化されたものとの比較では見劣りするかもしれませんがサイズはM・L・LLをご用意。相談支援センター「ぽーとからすやま」の職員にも可能な限り協力してもらいました。作製過程で後輩職員が先輩職員に作り方を教えたり、自発的に大きいサイズの防護服を作ったり、工夫を凝らして取り組む姿がありました。このような状況だからこそできる、職員間の関りがあったように感じます。

真心たっぷりのガウンは、200枚を西水元あやめ園へ送らせていただきました。今回の経験を通して地区や事業を超えて、さらには社会に向けて貢献できる取組みにつなげていきたいと思います。

完成したガウン

生きにくさを抱えた人の支援
「今度こそは」の思いを共有

八王子福祉作業所

障害があっても、親族の支援が得られず、福祉にも繋がらず、生きるためにやむなく罪を重ねてしまう人は少なくありません。当施設がそのような「生きにくさを抱えた人」の支援を始めて7年が過ぎようとしています。その支援は、幾度かの関係者会議や刑務所への面会、生活全般のコーディネート、関係各所との調整から始まります。出所後は福祉サービスの受給や年金などの諸手続きを経て、日々の就労支援や居住（グループホーム等）、金銭管理、健康管理、余暇支援など、多岐に渡る日常生活を支援しています。また、再犯してしまった場合には留置所や拘置所への面会、弁護士と相談しながらの更生支援計画の作成や、裁判で証言する事もあります。この7年間、縁あって6名の人達を支援してきました。皆さん、「今度こそは」と熱意を持って作業に打ち込み「どうですか、頑張りましたよ！」と笑って報告して下さいます。そのくしゃくしゃの笑顔を見ると、まだまだ「生きにくさを抱えた人達の支援を継続し、その支援の輪を広げて行かなくてはならない」と、胸が熱くなります。この夏も一人、私たちの支援を待っている人を受け入れます。

大切な日常を取り戻す

フェイスシールド作成

リアン文京

緊急事態宣言が発令され、ワークプレイスぶんぶんの生産活動も規模縮小となりました。その時に確認したことは、利用者の安全と工賃の保証、そして、今だからできる地域社会への貢献活動を展開することでした。まずは館内のスタッフ向けに、外出自粛の中、通勤して利用者支援にあたる職員や給食業者などの関係者にカフェからコーヒーなどを無償提供しました。おいしいコーヒーを飲んでほっと一息つく時間をもってもらい、みんなでコロナを乗り越えようという発信をしました。また創作グループ「みんなの工房」で作成したポストカードを日頃お付き合いのある地域団体、企業の皆様へ「一緒に頑張ろう！」のメッセージとともに送付しました。先方からは「元気を貰えた」との声を頂戴しました。

さらに、入所施設内での感染発生に備え、フェイスシールド98個、防護服800枚を製作しました。これらを社会貢献の一環として西水元あやめ園や区内の事業所に無償提供し、これからも区内の訪問看護ステーションや薬局などに無償提供していく予定です。これらはいずれもリアン文京が買い取り、利用者の工賃原資にあてています。これにより利用者の工賃と社会貢献の課題を解決しました。

そんな中、全国就労継続支援A型協議会から「医療機関向けフェイスシールド作成」のお話しを頂きました。大手文具メーカーKOKUYOから無償で提供された材料を使用し就労事業所が作成にあたります。完成品は必要としている医療機関に無償で提供します。就労事業所へは日本財団から工賃が支払われる仕組みです。コロナ禍における社会貢献としての意義を強く感じ、法人内の施設にも呼びかけ最終的にはリアン文京を含めた6事業所が参加することとなりました。リアン文京が法人の事務局としての役割を担い、各施設の作成の取りまとめをしています。喫茶とパン販売の売り上げは月170万円の減収と大きな打撃ですが、ウイズコロナの時代の就労継続支援事業の在り方を模索しながら利用者の皆さんと社会との繋がりを大切にしていきたいと思います。

医療機関向けフェイスシールド

施設あれやこれや

武蔵野児童学園

長いお休みがあけました。勇んで登校する子ども、しぶしぶ登校する子ども、それぞれ一年上級生として、新しい一歩を踏み出しました。様々な状況を肥やしにして、子どもたちは成長していきます。そんな子どもたちの姿に、大人も教えられることが多い今日この頃です。

駒沢生活実習所

世田谷区緑化事業の一環でゴーヤの苗をいただきました。夏には日差しをよけるグリーンカーテンになることを目指して、利用者と日々水やりを行っています。ここで一句、

「天高く伸びろゴーヤと水を撒く」

大島恵の園

施設や地域の行事が中止となり、それでも利用者の皆様に楽しんでいただこうと6月9日に屋台風の献立で給食を提供しました。チケットと焼きそばを交換するなど雰囲気だけでも楽しんでいただけたようです。

九品仏生活実習所

南向きの食堂の窓は、陽当たりが良く冬は暖かく暖房いらずですが、夏は厳しい陽射しで閉口してしまいます。そこで、この時期登場するのがゴーヤのカーテンです。今年も農地園芸班のメンバーが植えたゴーヤの蔓が心地よい日陰をつくり始めています。

きね川福祉作業所

自主生産のかりんとう饅頭は、区内イベント開催自粛が続く中、区立地域福祉・障害者センターや利用者家族向けの販売を再開しました。これから徐々に生活が落ち着いた秋頃には利用者と本格的な自主生産作業に力を入れていきます。

すぎな愛育園

八王子市内各個店で集う「マスクペイフォワード会」様から布マスク80枚、不織布マスク300枚の寄贈がありました。コロナで様々な制限がある中、子どもたちのために役立てて欲しいとの温かいお気持ちをいただきました。

えみふる

千代田区は人口が少ない特別な区ですが、感染症の影響で生活介護のご家族が利用を自粛され、利用率が減少しました。かたや療浴サービスのニーズがあり、送迎も含め対応しました。現在は通常の運営に戻りました。

八王子生活実習所

まだまだ感染症の対応は続いていますが、活動を再開したフィットネスやアトリエサークル、音楽活動に利用者皆さんは元気いっぱいです。少しずつ笑顔も大きくなってきました。秋のわたぼうし祭は、自分たちだけで行う予定です。

配食サービスの継続

練馬福祉園

園では、平成21年から地域に根ざした取り組みとして、近隣の高齢者に夕食のお弁当を配達する配食サービスを行っています。しかし、今般の新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からサービスを一時停止しなければなりませんでした。再開目途が立たない中、お客様に停止延長の連絡をする度に配達を待ち望む声が多く寄せられました。お客様が安心して、安全にサービスをご利用頂くため新たに感染防止対策を講じる必要がありました。

新たに取り入れた感染防止対策は、配達備品の消毒、手指消毒用のアルコール携帯、直接手渡しの配達方法からソーシャルディスタンスを保ち、玄関先での非接触による配達方法を取り入れました。非接触による配達について、馴染みがないお客様もいましたので、写真入りのチラシを作成し、ご理解を頂きました。6月中旬から配食サービスを再開し、お客様からは「久しぶりに食べておいしかった」「これからもよろしく」との声を頂くことができました。今回の配食サービスの一時停止によって、お客様の当園の配食サービスへの想いを知ることができ、改めて地域に根差した取り組みとなっていることを実感することが出来ました。

接触しない配達でお届け

祝・せたふく引っ越し

世田谷福祉作業所

都立施設として1967年に開設した世田谷福祉作業所は、平屋の都営住宅に囲まれてスタートしました。それから53年を経て、一帯の建て替え工事とともに4月に移転をしました。当初は平成29年度移転予定でしたが東日本大震災などの影響もあり、延び延びになっていました。

行政をはじめ、建築や設備、運送業者、引っ越し作業のためにお手伝いいただいた利用者やご家族、地域の皆さまのご協力を得て、無事に引っ越しを終えることができました。法人各施設にも研修等による協力をいただき、職員のスキルアップを図りました。就労移行支援・就労継続支援B型の利用者にとっては待望の、4月に新規開設した生活介護の利用者にとっては期待の、新しい施設での活動がついにスタートです。きれいで、すごくおしゃれだけど、何がどこにあって、自分が今どこにいるのか分からなくなるような、毎日が探検でした。

4月から怒涛の数カ月で、旧施設のことを振り返る余裕がなかったのですが、空気の入れ替えや、掃除のために旧施設の敷地に入ると、今までの当たり前が次々と姿を消していくことに郷愁を感じつつ、新しい施設でこれからたくさんの物語やドラマをつくっていきたいと思いました。

心機一転、新たな物語を紡ぎます

ぷらさ

赤い羽根募金集計

法人本部

法人では毎年、赤い羽根街頭共同募金活動を法人内各地区、事業所で実施しています。各地区で違いはありますが、最寄りの駅前などで募金活動を行っています。募金にご協力いただいた方々からの「おつかれさまです」という声にいつも温かい気持ちになります。昨年度も多くの「おもいやり」が集まり、303,300円を赤い羽根共同募金会に寄付しました。今回、光栄なことに社会福祉法人東京都共同募金会様より感謝状を頂きました。今後も、「おもいやり」の輪が広がっていくように、みんなで協力しながら募金活動を続けていきます。

いただいた感謝状

リンクス椚田畑作業

リンクス椚田

昨年7月にオープンしたリンクス椚田は、地域とのつながりを拡大中です。事業所から歩いて行けるところにバドミントンコートより少し大きめの畑を借りて、農作物つくりにみんなで挑戦しています。雑草取りは大変ですが、利用者皆さんの一生懸命な様子に、地域の方から「これ、みなさんでどうぞ」と、うれしいおすそ分けも時々いただきます。耕運機を寄付したいとのお話もあり、ますます畑仕事にのめりこみそうです。収穫ができるようになったら地域の方をお呼びして芋煮会を企画したいですね。

お芋をいただきました

お知らせコーナー

8月
29日(土) サマーフェスタ (武蔵野児童学園)

9月
13日(日) 敬老会 (西水元あやめ園)
20日(日) 敬老会 (西水元あやめ園)
26日(土) GENKIまつり (きね川福祉作業所)
26日(土) わたぼうし祭 (八王子生活実習所)

10月
24日(土) 第19回くすのき祭り (東堀切くすのき園)

新型コロナ感染症予防のため、行事の開催を中止・縮小する場合があります。開催の有無等、詳細は各事業所にお問い合わせください。

ショーケース「織物コースター」

小平福祉園

☎042・433・9330

就労継続B型サンライズの利用者の方が週に1度1時間半ほど工芸的な制作を行っています。今取り組んでいるのは織物コースターや木片アクセサリーです。集中力や根気のいる活動ですが、利用者の方は楽しんで自主生産品を制作しています。今後は寄木細工、貝殻リースなどを制作する予定です。

お一ついかがでしょう

武蔵野会後援会

社会福祉法人武蔵野会が経営する27施設と9つのグループホームの利用者のために、より良い環境や施設の充実・施設の円滑な運営などを、物心両面から支える組織として、武蔵野会後援会があります。皆様のご理解とご協力により、会の拡大をはかり、法人の運営基盤の確立を応援していますので、ご協力をお願い申し上げます。

〒193-0931
東京都八王子市台町1-19-3
電話・FAX 042-626-9772